

秋田の製陶業は、明治期に鉄道が普及したことで、安価で丈夫な焼き物が流通するにつれて衰退し、明治29年（1896年）の六郷大地震により登り窯が破壊されたことで一度完全に姿を消している。この写真は、旧白岩焼の登り窯があった場所だ。脇の林の方には、当時焼かれていた白岩焼の陶片があちこちに散らばっている。現在再興している白岩焼は、民藝運動家の浜田庄司が昭和49年に訪れ、技術的な指南を施したそうだ。

秋田県北秋田市阿仁合にて、かつて平賀源内が阿仁鉦山のコンサルタントとして招聘された際に、偶然にも良質な粘土を発見し、“水無焼”なる窯元をこの地域に作り出した、この情報を頼りに阿仁郷土文化保存伝承館へ訪れる。展示されている1枚の水無焼のお皿を見ながら、源内が発見した粘土はどこにあり、どこに工房があったのかを、学芸員さんに尋ねると、阿仁合小学校を少し下った“下浜”と呼ばれる場所の近くにかつて工房があったとされ、線路をまたいでさらに降った阿仁川沿いで粘土を採取していたらしいが、今はもう埋め立てられて見つけれないのだそうだ。

阿仁合にある高田食堂にて昼食を取る。
お店の方に“水無焼”について尋ねるが、
そんな焼き物があったことは初めて知っ
たそうだ。

工房があったとされる小さな集落には数件の廃墟が並び、
痕跡はほとんど見つからなかった。集落を降り、秋田内陸
線の踏切を超え、粘土を求めて阿仁川の方へ歩く。やはり
阿仁川の川沿いは護岸工事によって埋め立てられ、そこか
ら舗装されてグラウンドや公園となっており、かつて粘土
を採取していた風景はコンクリートの下に埋まっていた。

阿仁川沿いのすぐそばには黒い山がある。銅鉱石を溶かして精錬する過程でできるカラミと呼ばれる廃棄物が積み上げられることでできた”カラミ山”だ。カラミには鉛が含まれている。鉛は毒物なので、食用の陶器には使用が禁じられている。鉛中毒を起こすと、人格の変化、頭痛、感覚の消失、脱力、口の中の金属味、歩行の協調障害、胃腸障害、貧血が起こることがある。精錬されていない黄銅鉱石は真木沢鉱山で採取することができた。

山の方には粘土がないものかと、真木沢鉱山の道を歩いてみる。人の気配がない場所を歩く緊張感の中、秋田で購入した熊よけの鈴をかき鳴らす。少し開けた場所に着くと、大型のタイヤの跡が交差する地面に、いくつか土の山が盛られていた。瀬戸物の陶片など人の生活からでた廃棄物の混じった土。解体工事現場から移動してきた、建設発生土＝残土と呼ばれるものだろう。注意深く見ていくと、わずかに粘りのある土が紛れているところ採取する。

阿仁合駅から一駅の小淵駅の間。距離にして3キロほど阿仁川を下ると、現在進行で作業している護岸工事現場があった。現場監督の方に声をかけ、粘土を探す許可を取る。大きな重機がいくつも稼働している。ウンボと離れている場所を観察していく。ほとんどが砂利で粘土層などは見つからないが、拳くらいの大きさの乾燥した土の塊を拾う。粘土が凍った時のようなシワに似ている。水無焼のあったとされる場所から流れついた粘土の可能性もある。それだけ袋に詰めて、現場を後にする。土砂は大きなトラックに乗せられて運ばれている。車でついていくと、くまげらエコーラインをとって一山越えた鎌沢と呼ばれる場所の、小阿仁川の土手に移動していた。

那覇のゲストハウスで、地元の人や旅行者と話をする。恩納村のビーチで漂着した軽石を大量に見た話を聞き、同じ場所を目指して車を走らせる。ビーチに着くと、漂着軽石の量が予想よりも少ないと感じたが、人の少ない奥へ奥へと進んでいくと徐々に灰色に染まっていく。珊瑚や貝殻、漂着ごみと混ざり合っている。貝殻と珊瑚と軽石を拾った。砂浜の景観や漁業に深刻な影響を与えているが、ダイビングをすると、様々な比重の軽石が海中を漂っていて、とても幻想的な景色を作り出しているらしい。

沖縄本島南部に位置する八重瀬町。赤土の上に広大なさとうきび畑が広がる。沖縄の赤土にはマンガンノジュールと呼ばれる鉱物が含まれており、ヤギのふんのような見た目でコロコロと落ちている。伝統的なやちむんの釉薬や顔料に使われている素材だ。5粒ほど見つけて採取する。

山の中腹に差し掛かったところで、「作業路整備中」の看板が立ち、森の中に入っていき道が道路脇に見えた。車を停めて、作業路に入っていく。薄暗い森の中は、クマが出る心配はなくとも、何か人間ではない生き物の気配を感じる。足元をよく観察していると、白い土が転がっている。水をかけて粘り気を調べる。砂っぽい感触だが、風化していて粘りがかすかにあるようだ。

作業道を作った際に掘削され、土が露出している地面を移植ゴテで掘ってみるとより粘性のある粘土層が見つかった。層の違いで鉄分を多く含む赤い粘土もあり、混ざらないように分けて採取する。現在沖縄では、白い粘土を採取できる場所が土地開発で道路や建物の下に埋まってしまう、似た性質の白土を国内外から輸入している。国頭村役場に電話し確認をすると、この作業道は村有地で林道として作られた道らしい。経緯を話し、少量の粘土を採取することに問題はないそうだ。

ヤンバルを過ぎて本島の東の海岸を走り、那覇へと戻る道中、辺野古の新基地建設現場を通る。埋め立てに使用される土砂が山の方から運ばれているようだが、採掘場も米軍基地内となっており立ち入りが許されない。常に厳重な警戒体制でゲートに近づくことすらできなかった。辺野古の基地が見える遠くの畑から、ただ眺めた。辺野古の埋め立て土砂に、南部の土が使用されており、沖縄戦の戦没者遺骨が含まれていることが問題となっていることを数年前にニュースで見っていた。

恩納村を後にして、海岸沿いを北上する。気持ちの良いドライブだが、土が露出している場所はなかなか見当たらない。国頭村に入ったあたりで、東と西を横断する山道の、与那安田横断道路にハンドルを切った。ヤンバルと呼ばれる森を通っていく。南部との景色の違いはもちろんのこと、植生が日本本土の森では見ることない熱帯雨林のジャングルのような自然は、少し不気味に感じる。圏外で携帯の電波は届かない。

陶器を作るために、粘土を精製する過程で混じっている異物を一つ一つ手で取り出していく作業がある。石灰石や珊瑚が出てくるたびに、辺野古埋め立て土砂に混ざる遺骨が脳裏によぎる。白い石灰岩や珊瑚は人骨に見えてしまう。土の中から出てくる鉄屑やガラス片。様々な時代の人の生活の痕跡が混ざり合う。

朝、沖縄南部を見下ろす八重瀬公園の展望台。すぐ近くには「ガラビガマ」がある。なんとなく近づいてみるが洞窟の入り口のずっと手前で、立ちすくむ。戦争の歴史や、何か原始的な畏怖の感覚を内包する洞窟の奥の闇に、お腹のあたりが振れるようにただ恐ろしさを感じてしまう。もう少し上の方へ行くと、琉球石灰岩の採掘場があった。この場所から、沖縄の様々な場所にこの白い岩は運ばれているのだ。

沖縄でも秋田でも、大型トラックが土砂を運ぶ光景がある。この土砂はどこからどこへ移動しているのか。

民芸パパーの店主である阪本真千代さんに、お話を伺いながら器を選ぶ。
真千代さんは沖縄まで直接作家さんのもとに買い付けに行き、作家さんとの
交流を大切にされて器を選んでいるため、ひとつひとつの器が持つ様々なス
トーリーを語ってくださるとともに、選ばれた器には”景色”を感じる条件
を満たす器が多いように感じた